三五記本末

伊地知文庫
文庫20
295

三五紀全

文庫20
295

伊藤グリ書冊

それ人は賢愚あり、賢は稀にまれなり、愚は用しなり。衛場
あり、勝ちはかりそれの沈者へ、それ者へ
沈揺りいそ沈年に毎年して家智と以を
も表流を吸ひ、ひいろ数万の一も書ふ
年々寄りみ、ものくしくなりたへものと
沈芝ものくく学事なれそ故へし紙を書き

御と親乃子をいたりて言を集愛沢ひろひ
旧義をも書たされて御軍布徒よ寄よ同又
言代なるべき軍ハさしてまるべきをれハ挑
ムとをあるとをあれハ人まのよのうて敵て
右動すれハ拘うしかれうとをしこの城よりさ
なかしまして みちハ廢りて形影ハ千こ有る
うとうしと思へしと儒素の後世ハ三賢のひとり

乃ち歩行して為ものを代て義所仇乃事業あ
仇の如き河邊ひとまりてひとまりて行るる代報ハ
ましかようの蕎沢ひろひ寄ひろ高くしてあを
く見るを濃とそて〳〵思うこのやうなる言乱をも
庭の敷しり初ハ耳うさせ〳〵 松実ひろ〳〵 張よ
あ〳〵旧まうくして井蛙の濵海の波て不知郎
鶴の言雲のうへ沢思ハ法ムうをく 拙ちうと

猶そりてかくれなきくわしき事ともの三甲より本
に今其派ほかりし鄕の文明なりん人ありさこに
ありて雌雄と弁ぬのやし第七歳七丈にほ
ちし法源友にほしと秋そ月ハ好ゆかりゆかと
つるまつりしりこのうち七回に及まて寝食
と忘病席ほいりん嗜もてこきの心ハ怠りとも
あとの遐躊の一日乃長途よると本度とる完の

是をつけられしかるを叶ふの庭ともとも
らし家よそのやうのわさやうあり莫乃志ある也。
感して古もあり明月の左とる桂とか仍抜粋
末二を集て其老の心底ほ称し給ふるへし

一 歌論之事　第一 幽玄論　付 妙玄論 遠白論
四季論　第二 長高論　付 高山論 浅海論
第三 有心論　付 物哀論 理世論 撫民論 不明論 至極論

才四 蕉翁 付春雨翁 花蕉翁 麦五 事
可独翁 付春笑 麦六 面 拔群 写古 麦六 面
白翁 付一真翁 曲翁 才七 濃翁 麦八 見翁
才九 有一節翁 才十 拉鬼翁 付陽力翁
已上三十八翁
麦一 幽玄翁 後鳥羽院
為家卿 ちはやふる
為家つらてをわりんとそ思
川瀬にすむ水の泡のうきぬるかたそてき
ちはやふる
ちはやふる
梶花雨洞 新秋地 桐葉風涼 歌庭天
扁舟蘆猪 秋風洞 旅店紫蹊 暁月斜
燕子楼中霜月夜 秋来只為一人長
行雲翁

[illegible]

[illegible]

[illegible]

菊有花特錦帳下　廬山雨夜草庵中

夕殿螢飛思消然　秋灯挑盡未能眠

生涯夏去只望水　老後人非獨見山

廻雪歩

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行宮見月傷心色　夜雨聞猿断腸声

遥々鐘漏初長夜　耿々星河欲曙天

何特家是思君處　月入紗窓曉奇鐘

ゆうの書ゝ先行りいとや皮ゆにわひ行つき
ゆんむしていすの神ゆ幽玄とゆゝそ想ゆ所乃
心河出りゝゝゆゝさゝ也行ゝ四言乃あゝ
とゆをたゝ幽玄のうちの解情ゆう迫心わる
つきゝゆ幽玄ハ想揺行玄四言ハゆのゆゝ
所行出玄といゝゝハ玄ゆ中ゝ南海ゝ清玄

乃月と常ゝゆ樹花言乃風ゆゝゆゝ乳玄
の心りて心河の知ゝ新乃ゆゝひゝゝん所
行行ゝ四言ゆ神と言ゆ地元父ゝゆゆゝれ
し先いゝれの海ゆゆゆゝ是こそ和ゆゝ
ゆを知ゝゝ知心ゆ月玄言ゝ行神ゆ
されハ所ゆハゆ行ゝものゆゝゝゆすち行
玄形ハ玄事ゝゆん清を行ゝ書ゝをゆ行ハ

雖かやうなれとも含蓄の説ともく聊隔句の
故を披なきにしもあらす見合ゆるて詩哥を
つらね置て作りおき侍てやすまに二段古村的
なるへし菊花聞つ庵しは寄ありて思え
ほかに物のつくり詩もとくその趣弁ぬ知者あ
らハ作へおよこなふとそく

第二十二長高躰

都にて梅人のおもかけハ花よ月
そさやけき　ふもとにのミつもれやさくらみる葛
城のこなた山の嵐にしら雲　うつり行雲
よ嵐のふきはらふ西の木のへのこき山

三五夜中新月色　二千里外古人心
野老不知堯舜力　酣歌一曲太平人
孤鶴帰皐秋雨吟　臥龍在水暮雲寒

○高山雅

吹ちらす風の音ばかりにて本来空しきものを月
やあらん　いつくにか雲の原の三つん月は
かくれてもかくれぬよりの影　世代ちしらぬ山の
動ぬ雲風よ雲の花やあらぬ

老旅秋鬢天山雪　瓶論浮世涸水泡
六十餘週看不飽　他生定作愛花人

暮年容鬢蹉跎　秋日頭陀道路深

○遠白雅

天の戸をわかるる雲のうつるかの月の影
そ沈まる　墨絵人の里わるをあれば人の
あるへとゆかりもなし　但人もわるる花
の宿なしわ月のかたもうきて
遠雲百尺暦年老　宵幾回仍旧園

故国三年孤霽月　帰程万里行帆風
枕擡秋舊寒嵐色　鼓笛聲喧落日前

澄海新

あけぬるかぎりの世に新たなる月に
いかなるあきぞ　ふるけ湊そ
こゆるる　苔に袖ぬるる　まつ
まいとやすまの浦の風ふいて田の森の

秋の初風

奈陽有月猿三叫　商嶺雲高雁一行
水寒岩荒叢花冊　霜蓬鬢吟散班翁
佛像新容山月滿　法皇遺跡岸草荒

式部はなれの世しきるそはなれぬ海くれ
白うの浦の浦新このさ浦くの中の長うの新
此中にうゆうの海おそ夜の山ゆうそ白新

ハ筆者天性のたんへ筆者も良あたん稽古に常
にも源氏也中ても今の古今集ハ此中より出
さんへハ新古今より家をもつくりしも多し
よむ時わらハおかしきや歌人との頭し

第三 有心躰

津の国の難波の春ハ夢なれや蘆の枯葉に
風わたる也

山深の八幡の松も老ぬらむ
たゝ山姥のとしやをさし　紫ハわけて多くハ
人の袖にハをすゝむ月ハやかて知らハ

今日不知誰計会　春風春水一時来
花宮日暮笙簫断　遥望微雲洞裏帰
北叟馬肥春草短　南賓雁痩穫風老

物哀躰

花見れハいとゝ哀そまさりける詠人とふ人

あらしハ　かさなる花のしらぬもあらしかな
こゝろこそうつるも山川のかり　小藤原
ちり霧の浦やまてはいつかしと思ひ定むる

故園桃李看無益　情在舊遊不重苑
貞女峨邊雖接跡　望夫山下欲石隣
短詞不及秋山趣　長楽久傳古寺名
不明科

墨染の衣うき世乃花盛をりわすれても折
てけるかな　かりそめの別とけふを思へと
もやまことの旅にもあるらん　なかむれハ我
山のはに雲わし都の人よ春ともみえ
歌酒家々花處々　莫空管絃上陽春
一樽酒尽青山暮　千里書廻碧樹秋
莫言飲酔迷帰路　只有清谿月送人

至極哉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

不醉黙中爭得去　摩圍山月正蒼々

姑蘇臺上煙花月　寧賞春風爾管

一字不足歟

錢塘去国三千里　一道風光任意看

理世哉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雖言春色長安到　窮腰南枝花始開

城柳宮槐漫揺落　秋悲不到貴人心
霊禽莫吠微禽志　雲路再誇一挙息

○拾民歌

[illegible]
ねものとハ　[illegible]
[illegible]
小代を[illegible]
[illegible]

三世號路同茂月　万里帰心驚遠鴻
宴席慇懃延久跡　詞花獨異有風情

是神う徳よ所の和懐ようなる[illegible]
心をあらくしまんとすなる事とて　[illegible]
うられの又ハうゝ心をはなれ[illegible]
れハんをしまむくと心をこのけハ退[illegible]
所とくいつまゝとうゝねこれ[illegible]

ハよろしく治とよむ也 元文ハ両へ推き凡心術
をもつて主柱とすへしと云り 理世撫民の主柱術
ハ太宥惣心術の中乃本源にて同惣心術となる
りう捷くわのみまにけふ従てく覚乃柱
まんをふくめるすへからん 數代理世撫民術と
すへしまもるゝの事をハいとゝ申渡うつさてよ
に心源ふやすよ派したりともあれともハ有心術よ
拵して 理世本の奇也ハ申へからぬ 有心術のうち
わかさの不拘へし時ハ異城堯舜高朝乃延喜
天暦本をを学くいまむの賢王とかしるしたる詩
の術をも後理世撫民の術ありて無上の主柱
とすへしかこれしつゝ申すとハ是ある総く弁
慥つきしや

第四羅術

あらしわたる花に鳴くれ初舞河そ
よりつ　ありつてなほ暮つ代と雲風のまつ
とせしまにをさをつよくつ　もかひつはいよりも
そのきのよれ河のせさむしろおきなつ也

長堤織草河邊緑　遠郭新鶯竹裏啼
一聲山鳥曙雲外　万點水螢秋草中
玉輪低月中天曉　金鐸振風上界秋

存直辨

夕されハ門田のいなをおとつれてあしのまろやに秋風
そ吹　暮の代ハ春しらそたつ松風やみす
そ川のすまん流ハ　さむしろわよ衣かたしき
ひとりねやしてわらんかた流れ枕

有琴有酒閑中樂　無喜無憂世上情
十八公榮霜後露　一千年色雪中深

氷封多面岡無浪　雪黙林頭見花

花羅漢

[illegible]

[illegible]

[illegible]

西樓月落花間曲　中殿灯残竹裏音

浮螢朝槿露花色　餘命暮林風葉紅

雲漢

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四時寒落三分減　万物蹉跎過半秋
四禪年積纔庶舊　三昧秋深至都寒
曉峽苔深猿一叫　暮林花落鳥一鳴

竹斎

[illegible]

[illegible]

長生殿裏冨春秋　本巻門前日月遠
班女閨中秋扇色　楚王臺上夜琴声
望夜雲嵐千條雪　得火煙村一道霞

[illegible]

[illegible]

[illegible]

抱き流よくよくみあしきうの春をもちて深きね
數ゝ多く行へし竹徳よ多うのへうす中あうう
すこし流して物を記あうく行へし出雲よ來
と讀すへて唯この御よハあうゝえへしやうち人口を
れしふこ哉

貴臣可施辨

太つとへ秋の霧えの長夜と春をそいのりかれ

ゑゝやとらく　いそうれぬものくれこそ春かれ
むかしハよ深く咲し春うハ　ちりつもれハ為
ねきと採つ夜衣をもそみ記をハみをうさこそあり

柳無氣力條先動　池有波文氷盡開
螢火亂飛秋已近　辰星早没夜初長
不是花中偏愛菊　此花開盡更無花

秀逸辨

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

碧落空雲稱鶴心
夜雲収尽月行遅
晚寺鐘声度水来

秋彩帖

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行吟古集納涼詩
請命沉頭不繫舟

○焉古神

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

門碍消尽銘無学堂　舍傾老尤[illegible]

往事耿茫都似夢　舊遊零落半帰泉
蟠牛角上爭何事　石火光中寄此身

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

〇卅六 面白拜

山伏よ浮世にくちぬ身なれとも今もしるらむむらさき
らん

うつりゆく人をまつ秋の山の風とこそきく

れなゐにほふにしきぬまての

いろを世にさへ見る川にその名

奥の紅葉にたとへて世の中をみつし

背為皇洛聲花落　今為江湖潦倒翁

暮葉蕭々雲断処　一行寒雁是吾郷

揮カ

雙涙幾揮巾上雨　二毛多抜鏡中霜

〇二具拜

山里にわすれられたる都人さひしき夜らん宿りのありて

庭の室に我につけて忘れ侍れとむかしの人や恋しき

人をまつ不破の関屋の板ひさしあれなはさそ秋の風

鶴カ

有山之路兎葵地　非醉非醒鶴髪人

江縣風生彼潔岸　渡林花落雪満科

〇景曲

やよ時雨物思ふ袖のなかりせハ木葉の後に何を染まし

人ハこて嵐の音ハふけゆくを[illegible]て

ゆ〜 花色ハやれ志賀の都ハ[illegible]

山の春のなごりかな

山帯ニ斜陽ヲ雲影薄シ　水断ニ乱石ニ谷声繁シ

春花秋月不如此ニ　金谷桃桜其任他

煙霞遠近應同戸　桃李浅深似勧盃

さればにや[illegible]大井河の流れの文[illegible]

かくてハ[illegible]寺の鐘[illegible]て

[illegible]の声ハ[illegible]

へ[illegible]

〇第七濃州

ちゝすゞめ[illegible]

秋のうつりハ　源ひとの秋のうつりハ

をしまるるすまん　立秋　つゆ未ぬらし

しらぬ間のあきの風とぬるるかな

竹籬暮葉青無紫　萩湖秋色日不貴

苑下横琴謝夜月　船中載酒敵春波

隨嵐落葉遊飛雪　抱石竹根似臥龍

・月ハ秋をハ海ハ春のあけぼのをハ

わさとやうふけるうなるまつ　夏ハ月ハ

見さしたきうすさ海ハ　とやらん

・中八見桂御

嶋ハ夏ハ弱もまさひの桂のそま　雪ハ秋の

文ハ　中ハ　みちのくの夕時ハ

ひとり庵のうちん　かりてしめこの志ハ

あて流ハ海ハ月をとるらん

風生竹夜窓間秋　月照松影壺上行

新河柳色千株晴　古國雲帆万里歸

埃北寒山紅斥堠　村南遠水緑消息

此神は法さかんにいらせたまふ風

ふ[illegible]ゆ[illegible]是を堪能の[illegible]ゆ又いとわろく

きさ[illegible]ゆ　歌もけの[illegible]

庵わさ[illegible]ゆ形象の新とそ[illegible]

けくしもゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

ゆをゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

もゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

のもゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

○中九有一貧神

立ちてゆみもきてそうん松[illegible]ゆ[illegible]

よわ[illegible]ゆ　義そ[illegible]ゆ[illegible]

湖上―白雪
殿帝―周文
白雲句一行諸
名該保雜文

秋風一著鱸魚膾　張翰搖頭喚不還

湖上有山今欲買　周文車載秋霜

白雲在至向誰人　殿帝爰中来夜雪

此歌といふは、はるかに昔もありき。昭士乃
このこゝろ、やまとうたさま也。漢文にはあらぬ
なれども、かゝるこゝろをさへ、はるかに見
聞くまでもて、郷国、異行とよまれし人、時の事也
然れども、かゝるこゝろを兼ねさせ給へる
すがたなるべし。

第十　拉鬼躰

物をそかりとむらくれなゐの梅の花ひらいく
世へぬる人　神風や伊勢の濱荻折伏て旅の
やせまくわすれ草へに

但馬よりの歌云々

すんりん時のやさしき姿

三巴峡月雲収白　七星灘波葉落紅

恩賜御衣今在此　捧持毎日拝薫香

伝他四皓辞雲色　唯我一人吟張声

強力新

うらん木と立白波とゆ〻後といつれかきりなき

きりの色　なかふ高うるはまつ〻ゆんりさせいた

わひのかさよ月明りるか　強やりよるかくへ

はりかひ陳かるをひろ拾ふ貴うるせ

故郷に是毋秋風涼　旅硯並人暮雨魂

路穿白浪朝天北　跡入青雲楚寒西

寒渓の明長松老　秋寺人稀落葉深

山風御の奇の工とはんすつく深めき紙き寄ね

り始ま星をとあいまひ雲をにありけて太陽ま通

き奇として誠らかなきこの心をうけあつまりよりすしく
繁昌の人を心をすくるように弥陀のこに親と知つ
らつまりて自然のふるまつへし骨を砕て
領信をすれて数ろう毫釐の本願なりとて
金言をうけ信ずるとやうん是を安上とうに人毎に
又和讃をけつねしいろいろもてるやこよ
くとやん弥陀の誓願なりとき方法なるべし

これは世俗のことなれども接られさ呂出雲によ
こうつくとくく曽て此鐘を鳴かれるとき
されども家乃宝のとうく鐘ハ鐘ハこの鐘
すこへ内うの声よまかりあなるへし鐘ハ元
もいうたはうとみ白毫相をてゆうされるき
毫光をこ一切のひさハつさらんとりて宝とすなよ
まと学ばれて拍鬼鐘を河の中道とりへこそ

とて思ひ分れぬ心をとゝめて年ぶゝ〳〵に月風雪の
移り〳〵撰ぶ也とて老心も深くつきそめて遠近
もろの絵をとりあつめ〳〵そ世ゆの絵ものゝ人
宝て物をなげうち詩歌及書画を落よ富きを忘
画をとりて唐の絵をなげ〳〵捨にうきをもて
絵のハ和かけるこゝろ共〳〵ぬるゝ方法侍とハ似
金岳の方貴ハ方接せ〳〵れてりもをハさまて拙
き〳〵絵〳〵寒に御合て絵奇の類あるを水
とこの味をかゝよ接世義て書術〳〵絵の紙見
なめ〳〵〳〵流通庭の絵ものとなすのゆゝき絵
文絵〳〵其人を絵〳〵道のこゝすまひをとゝ〳〵絵
知〳〵き級実色とり物ゝ人とを書せ〳〵れ絵ものや

色とゝ〳〵意絵とゝ〳〵人物事

元天象地形 植物 動物 木 物名 この神わんわよ

とりてハその名を称すべし所一字の中より部の字を
抜き出し是を減字譜と云ふ又ハ略字譜とも
にあり歌と伴へし待宵ハ詩をうたふ人ハ
秀逸の抜きをやうに伴へいとゝ待宵ハ不堪ハ
叶ふまじきをゆるされし乱脱不長歌といふ事
と　門賓接語宜期夏閨婦孤愛還娘春
是ハ影の切なもはりへ〳〵成なて伴ふ落
葉満水といふことをもつて
紙上よりとゝもし水上ハいかゝあるのわ
らべて
又月垂水といふ事を
すしへとわるうあれの宿をし芋ろの月のくまま
なて　山二首ハ月ハ所のあるくあり
おろへ〳〵これハ影とハ明られとをとろわ

又さ故に讓て紹巴もあるとなへハ聞しよりなき也
しめ月廿日許合に郭公を
有明にかけいて啼と聞そ寺の庭や経を
誦すらん
此哥ハ落題ありとてさ讃くよ
難しられるや いつにて定めかん詞の字の題と
扣掛るとめるもしくもあまりて我兼置しされハ
恋の題なとハさ様への事待なり

待期遠約恋
かりひきやきら見しよりねかきつゝて百夜も越つゝ丸
寝やんとハ

旦暮人恋
いはさきも徒らわんむとのあさゆふにまよひ我ゆめのこ
られ

隔日来恋

三月のはじめ頃にはひとつ西うきの名所まそよりいとゝ

・作者不遊惡

つゆ惡ハまそのわさ夜ものはいとゝ胸そ

ゝ

・鄙のわすれて必〳〵宮毎にゆくすゝめ事をわ

ゝ

・鄙をハその宮〳〵ことに所ゝそわゝさわ

〳〵ゝれとゝ〳〵ゝ見てゝゝこゝ試の鄙ゝそ

宮毎のゆくすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ事を分り紙

鄙のゝゝハ的宮拂ゝゝゝ

・池水事

池の沢いて蛙ハ水ゝ沢ゝ

ゝ

しきの字は新髭をそいてゆく新髭をはいてゆくをよ
んでゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
風情はゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
古集よりはゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
とゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

のゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

けいこうこ日ゝ共一句よりこれを書ゝ日ゝ[illegible]
詩歌ゝ[illegible]きよ 博川院の百首歌ハ一字ゆゝ[illegible]て
作れハこゝ[illegible]ならん歌の奇特なるゝ[illegible]
初の字にゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
乃至花なるゝ[illegible]歌乃歌ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

山奇し奇合は紫せる花の行くすゑて奇うしも亦彩へ
きよわるに衣ひの森と云てこさもとは行るを
うらとわるへしひ〳〵ふ奇しきも敷代とろかてはる
花の色の事をわるへし

春雨今ふてはる〳〵庚合ハ半ばなる桜雨乃上
郭公時鳥雨に鳴へし雨降うかひさしく桜て花
是ホもわるうちよ亦彩を彩りて竹の下

あかねとよしへ行り呂の泉乃あとをうこうんすへて
紅わるまし亦真秋真紅を見年たを亦さし
とのこうしも居へと朝源の彩ひ見て行ん山長尾
山行りり宣まハわし碧行へ野草野歌し
野徑ハ野たり海路ハ海の行へ
いそのの宮浦吉野河の海をよこうも
寄りこれをとハ知さ文事なれとも行へ又大

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こわきこうの名所旧跡のうち和の正さの事く
一切のうせうの仏物つきそを見録わるうそを我新
伝秘のおうとせしうとしたるとうたにもしのハはとし
らぬう我をもく怪をさわんうを習熟うたという
ハ必北魔陸のわのうう事代強いそく是ハのを
と同所春ハ又年の事し巳我ハ知ちうまう
ぬくとの面ねて結ハ又年ハと祖さうまうと
ろうう主有ようまちうくさうもうてハうもハしく
しうく
清川ハうう人のいそうハ名ようなうて西とのうう
清うう人清うう
高にとうつくの清ハ村ハうれハうくう川のかうのそを
うう
ちれ有の常産の今良のうのうかそうハ巳とう家氣
ろ様ハうもハ祖秀有ちれと様遠れれハ世正

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一所ゝもしに明意すべき事

百首をとり人まハ地所とて所ゝの所なるべ

云知らざる人ハ中ゝ秀逸出来ぬべしと

をとゝ〳〵業すべしさのみ思とてゝ事をその弱を

つゝしべし又いふ心労すれば事ゝ所ゝ毎ゝ

しに数とはしる事ハ新〳〵事ゝ所ゝの和歌計

ハ自然のゝ事ハ百ゝ年〳〵枝〳〵深思すべし

常〳〵わすれべしとその弱し然ゝ二十首をとゝ所

毎にゝ〳〵〳〵地所まり〳〵あべし必老の為ハ

ゝとてハ能〳〵業すべし歌合よりハ詩失精ゝ〳〵の

新〳〵しべし人事をゝてゝ〳〵みべし是けを

わり初ゝとゝまりゝ〳〵ん場と添べし是状結の所と

ゝ也ゝ

山橋懐中ゝ〳〵久〳〵事に所の路の〳〵ゝ

月ゆくすゑの涙のたまづさを多てかり初の花さかりの
の里　わすれとこし世ちの野川花ちてあたらか
なこしに月やうつる　言ふれは嵐の吉柳うつりて
月よみ行わすれぬるの
罪をとはの方の花のうつりもしきるや恋乃寄のは夫
海の方合よ
世ふれは多よ初にかりの花のやうふと人のうつれて
恨うとひまさし今の月のうつれた恋ひうれうつ夫れ
はる
是の秀句を係ふ恋とうれかるやけて空ふ鄭さ寄
合の方に
何ちきるのねうひの吉うつは出るよりも一和とわかり
はる
はの八百とをなとの恋とうとて空ふれ方合り出す
紀よわうこの又寄とも和とも同じうつれて恨りうと判者

類を離れ、それと奇ハさまを取りてねの枝接ぎ人
ゝ[illegible]ハ事を写ゝ御へ〳〵

一奇の接ぎ様

さきよりつゝ十紙ハの接ぎハ礼の奇の接ぎもしし
ゝ[illegible]ゝ色〳〵ゝ奇の接ぎにつきて心得の事
接ぎて作り習用ゝ[illegible]ハ物ゝに書ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ひろりまして句のうつるうんとう句まつりたんすハ
いたしたるく月度句わりうとそそ実にそのかとかろ
へしうれと先人のうとれそうの御つ仁掃部頭感
しその給事をそ一宮垂掃しぬれハ一句をれハ
と先一句ろうるれと一首を殺とうや御品一
宮を一句しとられて月しうるうぬをうるうと
ひとし一年の八月十五朝より給事よを

以て勅定わりしり被出ある仰しに形ひそうに仰
られく所の姿ハそれの極ろうとと仰をんとすき
と出ろうるうるいを交ひて云品所ハ五年有余の
四れの容顔衛てうれやうるうもう速常御こそ
しく変へて時の姿ろ清きて大気出て改よ
まうろうんとうるうらのすうやうようんあうまり
記事るひとりうれハ清てハ事年よこそ品今よ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日ごろ[illegible]の人々ら〜 梅ちる嵐の音ばかりして
見ぬ後世の所の所 上ろうきをそなへやらはし
ゆゆしくときこゆ 端〜をとりき寄とろく 捨遣り入て
行れたる〜 木の梢花心ひとれ行り
河舟のはやり〜 波つかて混ろ〜しての世代の
うぶ 山ちかき里をとれ者ろう 新仏ちり
やり又宮紀部と人の口さ行ろハ
みやこ人〜このみの〜 桜ちり花乃色ちりそろの明
かの ちれ川のもせの菊のうけろひて 涼
くすり女五の元 鶴の巣ろ〜 山乃流風ろ
紅葉ちこの秋の日ちれ ちろ〜人成る蔵
の山中風をたろ〜ろ れとろ彩ちる物成
五ろ人ろ〜みてきてろ 松浦や 加世 色流ろわ
らすれ 世のなろ〜 とたこそなろ 考ひ人成のな

くまを庵そ明かる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こそ上のの名誉もわりふかるべんべの風俗を
学ぶべきこの時の者ども詞ずうけうく所多
う事なれわわり者ハたゞ郷〳〵皆て走こと
実ゆるをうゝと戸畳と作り者と強いて事
うゝをゝんとなりゝおこに郷〳〵て見るもいう
ゝもぬけあてきをゝうに皆ゆゝハうなる郷〳〵
角つゝひろゝきさをけにやもく遠ぬべき中ハた
とハ上に接〳〵わゝうこうに行さとんとゝぬゝハ
見ゝゝきわとゝんゝ心のゝゝきさハえうまへ
おさわすゝにゆゝゝにるりとわんゝさうとゝるの
多八事をひゝ浦海よつゝくゝる事ゝ所ゝにゝせんなき
事ゝこれ郷り者ハゝろゝなるうりゆ所ゆんと
ゝゝろゝるゝゝとゝゝこゝろもゝゝきゝゝろんん
とそ郷の学ゝうに郷ゝうるも又思ゝ者ゝ者ゝの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

所のうつくしきもあり事ゆゑ

一文字のわきまへの事

こゝろ葉のうつくしてあるべきもうつくしうしたん句

みその事をとりく無巧なく文字をわすれずはき

いりてこゝろいうをあるべきてのけすくわまるん

を雪よくうつる歟ハ事文字も制乃源なわすれ

とゝハれとうひハ思ひ為こゝろハ紙をこまれハ

思ふ色

かゝるとゝ為の月ハ月ハ新よ繁

吹ものと思ものゝ月

はるゝもいろれも陽

こゝろあるれハ字のわりたる易よりとくらく

かゝるよのハわゝすきこゝろさまのてつゝる故よきて

ゝゝ沢事ゆへ

一こゝろの句ハ

冷もゝうん字句も多くゝ本こと

是江のあたりのうめさくころ
ほうり　いつとやたいらかのねまのいろゆて
人をとこ二月ふん　これ〳〵ふれうゝねんす
ものゝよしすゝ江このこゝろもんをうはゆゝ〳〵わて
ゝ物事をゝ　きゝうゝ江ゝうすゝていつをな
ゝゝゝ

本云

建保五年八月廿八日記之畢

遺老後素能作　定家在判

以後年于時寶治之年十月廿九日

後素能作為家在判

文永六年二月七日以後自筆本相伝年

後素能作為民　在判

永仁三年七月六日以後自筆本相伝年

後素能作為實　在判

正和二年六月廿日家芳逸後自筆本

書写年　通憲　在判

三五記　末

[illegible]信ゝの云ゝのゝ陰道の源ゝて[illegible]をすむ
[illegible]ゝと[illegible]ゝ[illegible]ゝゝゝ

小腎ゟ起ること、なり、立られ乃句を合すゝ、これ此の中風
宣の中風よりつゝきとれり、ゝろよまん寺に此病の
白に病われて宣の病といふ、兵病の句よ病わ
れば、腎の病といふ、中風の句よ病われて腎八
病やいふ風病乃句よ病われば頂の病といふなり
九三十一字乃歌の詞場ハ是ゟ大不成乃仏為
くゝ三十一字乃詞ゟ中に、ゝろわろ事のんを内記
吉宣の心地とゝ、ゝ地ゝ奇一首孫ハ一佛と
建立すゝふ内し乃ゝ千首百首沢よゝんゝ千
佛百佛と作ん功徳を切ゝ、ゝ、ゝ賢ゝ
なゝ面ゝ上人の云奇ハ是強ゝ作沢なり
とゝりけゝ乃仏一百ゝり制せすゝ、ゝ置てよ
まれゝ百歌ゝ、歌乃仏沢やゝ也ゝ事ゝ

こゝに毛受はこの乃沢年比久しくなみ〳〵わる附
はてもゝくまやうて生死のうち迷ふ物は云給ふ
よわはにそう強に出離要たうの学乃ゝ
と山人と思て拾弥陀の法を修行仕る
第一すちよいのうとれゝたわる夜乃夢
の年九〳〵も加〳〵と割き老翁の赤地
の錦の帽子に白拂沢うあて〳〵弥勒の御方

よわとうそつきてう部屋まで生〳〵行りう
沢見つけく山子弟〳〵と智ふん聖まて出離
一生のめと沢弟〳〵とれゝたれハ沒老翁うち
うこゝて男〳〵他の弥沢すゝ〳〵ゝ思をとり
て仕生すへ〳〵とゝ口うとそ弥〳〵の奇をわさ
〳〵られき強かゝ〳〵うう〳〵事共うりされ
て〳〵ん人沢者の〳〵にわ寺蒙まの方法

こしやうりやうやうん事なれたりうるて歳
除せられしを義よこそ学行その時ハ除きき
たとりて作行しも理りや又古歌を古たよ面
てこそ〳〵長哥と人たよわく短哥ハ地獄
たよわく旋頭哥とハ地獄たよわく混雑
歌とハ餓鬼たよわて飛鳥哥ハ畜生たよ
わく廻文哥ハ天たよわ法〳〵やうん也指
も口伝ものやうん時ハのうりて法りハ出家行
なりて〳〵或人の長哥短哥ハ法こそ不審と
し行りしもけよのとそ学行るいふ哥て成一字
此哥をハ長哥とうつけそうりあるこのくらい哥
をハ短哥とうつけそと同〳〵ふこそ人ら行ハ此哥
ん入いとるこわり但やうく三十一字ハ哥ハ短哥
とう歌ハ行りん哥ハ入れハ行りうきこのて

仮名くゝ仮名の事よこそ成一字を長音
とゝ[illegible]類はあもあもとかゝくまくつけを
うゆへよ長音とゝへし雑音はすべて音乃なる
はまさうこれ共あもあもとつけてきて七七と
つゝまる不合乃字めいかつなる
れるゆへに雑音とゝへ毛寝要抄後
とゝされきゝくゝ六義の事ゆるあり〻市

是人のあまくゝ音とゝるすべてとてきて
ゝはゝ又古載はゝ人母（きりこ）会りゝ作りハ
ゝ人先乃六義乃根本ハ毛詩こうるすをこと
う空〻〻仮を拾乃人〻〻くそのこゝすあひ代
見ゝ六義とゝハ風賦比興雅頌ゝの六文

第一風歌

風風ゝ人奇といへし仮風ゝとりて二種の仮

わり一まち高風甚事中の中素又鄙ひとて紛
るるなりへし即難波津乃言の是や二つまち言
風甚中備又鄙をとこ中の事ひとあらと
ひとの乃鄙へ小野春道ら延喜の聖代よ
ゆく〳〵年久しかりしら天氣よ遠事わつとく
我面乃中小野のいそ乃ら寺に鶯長志
こうち〳〵付者特禁中うて只ゆくりなく房
都を初〳〵ひそうよ故ゆうてなくさま
しるよ鶯よ鶯長〳〵て行々うわう河女我〳〵
て強ともに行とは行と即強異ひ強と雪ゆれ
ま長乃そのあてうよ強〳〵りし〳〵方別言風
乃方〳〵
九重に雲井ゆみし橋なもりて流れる白し
初〳〵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

陽といひて西く風よ光あり、夢中よ南くそ
のゆみのなりくをもをしへ押く風光とりて

第二賦云

かくへ奇とりへ

実紀よ思つゝみのわらきちをまにいろきたへ

を考すて

奇ハつゝをとりて奇とりて和云賦を

奇人の和をこく秀人ハ古人ハ一遍にしてめ
すゝく海抜ゝ紀を秀人といふへしハ奇ハ人と
ゝまゝ心ゝくゝんハ賦乃奇とりへきゝ
や皮ゝく紀の奇も一切よんゝけゝとハいてさ
きとゝ一遍よ思つゝみのわらにをゝとある心の
本に一切面白ゝくゝきんゝ那ゝ紀ハ毛ゝ和して
思よ演成ゝ武云秀人といをと教奇人と書ゝ

一切の物を一遍の紙にてくゝりて掛ちら紙数寄人
といふて人の行ふされハ物くをかりもち数
を又かりもちくゝ月ハかりも入をかりも
きんをかれ普ちくゝ一編ハ海せ物
此賦ものとてもしやう云云
きえ消てそふりとちんぬきて立ハくゝ物
秋のよ月

此ものハ立義てくゝちんぬハ賦ものとしてハ妄執
者とて掛りくゝ又掛りくゝ物ハ絶業
年数者者者よ云

まてといふてもしやせくゝとまりもちくゝハ紙掛ハ
とひまさまは　花も立物ハ月ハ物
あてもの者者者寄ハ

ちれハこそやりて掛ハ物ハ物ハ紙世ハ物

しわゝさ　はしめとめてとゝくれと合者の
もとにはゝりさにはこそ　まくまて歌ハ侍へしは
歌ハ紙奇く色葉ハ言紙色と紙といふことい
てり又五の奇も紙わゝへ
いまそこもゆゝまて人いつゝ　はしめ言紙と
ゝくとゝ　毛詩云紙在立量心云〻

中三比奇

はゝたらゝあとゝいふ事くみハたくらゝくも強きよ
やはすはやはり一ゝ付あ那比二すハ那那比三よ
ハ言葉比四ハ義神比く此義神比とハみゝ人
神の比五ゝ中三中四ハ似物の比や　あ那比と
ゝハ一事も二事とりて那とをいふきうや
わのゝくんと那事のるゝすハ悪なるせよ亦
のちゝひよ　はしめのんハ人よんなくけ思ふ

況てゝ多の奇くしは思ひ一をやすんとそのまゝ
と意との二すゝく作へゝは二の古成非のち
ひよ仏て叶へきし世れハ色ゝわんも非の
ゝゝ成ゝ成ゝ又ちきり無ゝゝく色まし
多めゝゝハせゝくハすれさ也弱ん事を
非の成ゝゝ也ゝ新へゝ思ゝ成ゝは二偏の
古成非乃御意ゝ任せと歌ゝあゝへわと
毒と乃はゝと我思の事をゝくやすん
とゝあれハ毒那比と思へゝ新比とゝ又
佛顕比ともゝし
ゝふのゝと長成思ゝ佛ゝあゝ立ゝやすゝ
新乃けハ
はゝ新比ゝ叶へゝ長
も今日申て言ハ新もちり新ゝんと清長
乃成新乃ゝれゝゝゝゝゝ事成俺方

あるなれども形容詞とは必ずしも言葉にあらざ
るべし。一切の奇なこの語の神の奇なりけさ
つるく物語へ。ものれてゐる形容詞とは偏容
詞とは言葉の方ゆきあるくみ海
ものなきたりとよわんあるよ偏容詞とは
さるのあはれ叶ひやさまを思ふ形容詞も偏
容詞も大抵は同じものなり。言葉詞とは詞と
義と二つの義を含まるをいふ。

義よりはさわるさまを義のあらはれをいふ。

こゝに清やかなる　こゝの新しい霜といふ
詞わりもよりは義わりなく平素の字を又
義の字とも云へり。例へばまはりとれども
とてにその字のはやりなるおれし行り志ろいわ
れども先生を此義とせられはしてこそ行ぬ

はかりのおきてといふことはわきまへつけて給
ハ起てなり最るつをてんハ置てくみてこれの
字ハ霜をつけてハ事の字なりへきこと人よつハ毎
に字をうんうん病やいさんとう人よ房せん悲思
よ者こ兵ぬきこうへ〳〵者りつハ者りきし
りこうんとん病きこうやハ人ハふりくりしたた
いうをと小徒ん不明 行言義比家者と云

梓弓をして長面をふりぬわすはへつらう
れ清きこん　うりせこう表看ふりこに
のへのみこうを地すはりこう
浪にうりこひ武隅りまりとしもあき勇武
いりよせん

義弁比と日八月家とえこうはすて形とい
ふ花を押る雲と云者こうれハ義術の民と

[illegible]

[illegible]

[illegible]

當家ハ天皇ニ仕ヘ奉る二わり 靈眞
本ハ、 眞ハ一わり 靈眞ハ
これ仏又ハ仏ハ我ハの為
神ハ靈をうき奇作りわれ作るまわ
しき靈眞より隔すへしや靈とりわハ
靈眞ハ靈眞方におさまる又眞年わらん為
てハ靈眞の眞中にかさねて亡家ゆゑ

靈眞ハ奇とゆへしやまれハ只靈とり
して眞ハなるさ所

コロロ意ハ志ひとつの眞ハ人とそ志ね
うくはもの

けすり今眞わるの本色

ハ又眞ハうりまくく靈もかさ所作り

拝ハつへき本家ハ君ようわれくひとり志花
の本うし

靈ハ志て拝ハ家ハ本うし

眞わり紀之節眞乃奇く是則冬の節眞と
雜眞もわるへ紀りく節眞とりの四時乃折節よ
ちくさ乃ゝく眞わるゝ沢面白くいひしるを節眞
とゝ申へ〳〵又眞といふよりきて歴言眞と眞嘉此
二の心わるなり之乃節眞は眞嘉れ眞やどられ
四時乃折節乃眞なり紀りつきて眞嘉をよ
こ影をくされは春は花乃比なれは秋は紅葉に
春紀は内也秋は月乃比なれは秋乃下葉は
もやをいとの数なりれ

隆末は紀乃名なり神人智うれの答へし歌

又歴言眞乃奇よ

大海よ紀の水よつゝしてもやゝ神人わるかしは
寄紀古今者乃中にはうれ海とゝ紀りたく
まわ紀ようゝ

○才五雜歌

きゝこと言といふのゝ異なるをすゝてとるなり

わゝたゝ一すちに始りまたそのあとなり

雅は二わり一すは言雅二すは意雅と言雅とふ

ハことゝに那〳〵ゝうしるさるゝ強し

偽のるき世なりせいなりの人のものとわゝ

はし

いろりとかりつゝとゝ文に出るまと

紛り物ハのもん

意雅といふハ心ハ成くとゝのる事あゝ初すこ

しゝうゝとうハせゝく治定ちゝきに始りもよゝこうゝゝん

をいつ面〳〵或人かゝる言とハ雅ハ兆と見りされ

ども雅ハ詞ハ他ものとなるべし

春立といふゝうゝあみゝのゝもうすゝてはゝハ

三四句

[illegible]ちゝハんハ成くとして初ハ

ちうとうひさうり刈ハかるわら屋の宮と称のぶ
の宮ハうとうひさうとれわらんけつまさ宮くし

○神六頌歌

いとひ宮といふなるべし、若神ハ宮わつりう頌よ
又積頌奇といふもわり、いとひ宮とも積んわ
れも所〳〵言を若部〳〵に月あたりうりぬと
いふなり、積頌乃奇とも所を若神ハ心わ
らい頌乃奇と言へり、故毛詩序云美盛德景容
以成生業而告神明ともいへり、是ハ六神の中ハ頌
乃不の文なり、日本紀ハ三頌ともくいひなるる奇
宮ハの光ハりと人ハらと表ちとそ（本ノマヽ）あひたらとそ（本ノマヽ）
あるなり　又或（式カ）第云赤ハの光ハといへり、
ハ石ハしもとこそりさ紀ちされこそ四宮ハにこの
つくりせり　柳ハ頌奇とハ六文ハ雅せられ

きさいの宮にいつきまつり給ふ告神明宮の毛詩の
已告神明宮の詩のわたくしの頌とよみてとりて是よ
りとをわたくしの名をなをかはりけるかんの法き
頌昭云けうの八九若神宮のわたくしといふ事の九
八はしらをいふを大内とさうていふるやしはしらこ
れを大宮とも申せ宮内とも申めれ守護天照大神
まもりまをせばかりの内侍所の八はすなわちまもり
かりのつかさをもしくもとりとりをこなりにに
ところをとりと云頌とをもてもしくとりもしくさいとと
八条義わり日記云橋木雅の神と出てさいと
第八の神とりまをせり又参たの家に新殿神
の神術はゆつりにさきにさはりをひとて作り殿神
供の供物を橋木の第をくちくりはつりはとと
もを近敷の法はいとひをあれは内裏とを

へし。門裏とは橋本なり。造主は多り。三七四とて
は三四といふなり。三四は七〻七多数されは多事
いりんとそは七〻のりんといふは七乃宮といふなり
つも。延載山門とは七〻の門といふなり。七数は七
人の賢人と集をきて政をさしたしされは
七賢きは門といふ。一人は寸二人は決七人はて
をれはこれは多事をれいの中まれはあれは
いろ〻とそ〻れとも。さすの賢人は世〻稀され
は武文云黄河千年一澄賢士千載一期とりけふ
も稀なるへきなれや。七人をれはこれは不但多数で
あるそらへ法てひたすき事はいりんとそは七世とい
ふ世の数をあらんとそは七逆といふなり。七宮とは
百といふ数なりとそ。沼さ法のよつる六神の
法をおしてをしたすへし。名とは花の世一

字の訓なり、短歌とは此長歌と号するなり七
五七五とつゞけるなり歌のいとまに不及旋頭歌
とは六句になるなり歌のいとまに
源河つるぎの人は二年わるれば新年とてみもひさんに
知るべし　折口寺にてちゝ人よりわれ知そのうこと
にわゝ嘆るハ行ゆく紀そを　これゝゝゝゝん
わ歌ゝ源河つるぎとハ下句の七字なゝ嘆そ
知すし
わさうゆのゆをまゝ花ゆやすに紀ゆ世そう
これゝゝゝゝ嘆ゝ　弼猛の奇とハ嘆ハ歌奇
の数なりゝ　いゝをゝ　ゝゝゝゝ

しらくもにさそはれつゝ　ゆくそらもなき花の陰より

はるゝん　　おなじくこゝろあり　又本の詞より

四文字ゝ二字わり　今の詞やうよりの詞は

りさこゆの詞をハ　たゝ　又はりさ　詞より

うちゝてしもは本は詞　てはりゝて　ゝてゝ

よ　詞は　にゝす　ゝる　は　四文字　とハ　へは

逆よ　二首なゝ　は　猫　の　とハ　事　作り

十字を　詞　の　句　は　上に置　てゝ　ゝ　わ

ゝてゝ　ゝ　わ　す　ゝ　といふ十の字　ゝ　ゝ　よ

わり　詞

わゝはゝをゝそはゆゝゝは　ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ

こゝゝ　ハ　ゝ　ゝ　又　おなじとハ　ハ　ハ

ゝゝよ　ゝ　ゝ　ゝ　詞　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ影とハ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゆへ〳〵ゑき古今を引れんとて古今よ物名と
ゆしうたをゝ又歌よ題序題曲流のものゝひ
わうはあれ物名よりわてゝ歌へし九うよ
しる稱〳〵のものゝひわうと光もはきを序影曲流
乃ものと物と古代光を序影曲流
奇の歌いうゝんと影序ものゝ美に
色 わるゝ〳〵 序 いとゝ 赤人 ものゝき 影 猿丸 わとゝもきれ 曲 いう

影 流町表 ゆうとゝ はうしてゝ きて 奇乃神世代
はを序影曲流ハ色ハ云をよゝんとするかゝハ
し序ハ所〳〵うゝんとするわゝ遊勝影を
奇乃影や影代はゝて四る云影すゝし曲ハ屋
ゝ〳〵ゝ色わるゝよ云ゝゝ流ハ女人の髮 天角
よ水とゝ〳〵ゝれゝゝよゆゝとゝゝすゝ
きゝ先ゝよハ女ゝ字ハゝゝゝゝ影

鞠といふ事に句毎に詞の縁わるものと合く
そなりうこと三位縁の詞もいとゝ縁くはりせ
ともぬつけはんとつくんとすはもしくうろい
うもとさやうのことにわにうせはてあはいとえ
ぬてとんろ〜上句ろけこらはしのひやうに下句
ろけこ〜はい上句のひやうにあとりうれとも
異意ようはろけそろ句はおこ和して上句下句

ろけのひやうにけるわはんかはは又上下句共一
具にうこたんそ写〜うこ〜ぎ縁所の貫尾とい
ろう姫のおろ字とおりう七字との合て貫尾わ
ひろ句とりへ縁の字といふ事縁の句ぬ詞り
ち〜光の字ぬわろ縁ぬ〜同ぬて縁乃字
とりそ尾ま和所縁ぬ〜春さきのはり
の字おりぬ縁尾〜との縁字とりは縁乃字

みなもと氏四句の用いまゝ一句あひら氏一句沢
親句といふ句ハ名の字よ沢の七五七〜の句氏
一句宗合ゝ氏ゝ皆合と云ふ氏ゝの字ハ
なり

氏蹴句といふと姫文字よ七五七〜の句ハそのつゝ
ら一句二句をとわてん沢一句或人云親句ハ秀
句稀なり蹴句にハ氏ゝと中ハ強よ
や氏奇ハ氏のなりさ氏ゝあひてゝ〜ゝ氏ゝ
ハ氏ゝなりさう氏す氏ゝ長氏一寸二分三分ホ平氏
ハ七八分の氏一寸ちゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ
く雅家たゝの句と沢ん家家ゝ沢ゝ氏ゝ氏ゝ
ひゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ
ハ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ氏ゝ
句ハ〜或人云この句ハ哀傷の句ゝ氏ゝ氏ゝ

て仮皮をとりかへて人皮仮帝の
御師傅として遊び月日を送りて
小薗（本ノマヽ）の出でもなく人数わづかに新のてくるを
立制をもつて諸国の使ひを発遣してさこそ
此てうをめぐらせのてうせの家傷のてくれる時は
此てうのかくへとりて出門をはあにあるへきを
仮名人まし帝とはかきあとりてやかのくとの
ものとの

ものとりてはいかの政事をかく聞まあり
まいはるに有為ふたの事立震てく生老病死
の四魔といふは天乃舞と記しまと御てくれ
とてるは徳は仮生老病死の四魔をてく抜へし
同此帝とりは何れ帝まてくおはしまいつるや答
九人九は文武の帝に仕てる人とりや文武の中る今の
かのくれものとりてくる帝は文武天皇の御事とう

やそのしるしの同人九位官位ハ何とのもうさや若
武扱云登金紫黄緑之席創蓮府槐門之衣と
いへり金紫黄緑ハ出師後の唐名なり蓮府ハ槐
門の唐名なりといへり此人ハ此書生涯の化
現とやいはんそのしるし
柳扱伝云是ハ故今吾よりも亡父の京とのもれ
ぬるかとて兼置し

このかの子とハ何とハ古今も漕ぎ出ぬ後の人なる
ものなり又何ハ嘉傷なるハ何とも出漕ぎ張とも
也我海漕ぎ出るとハ出家の人のうとうるかよ
そ給ふ人を送なりて漕ぎくゆん船とそなま
ほそ人やそそうくハるもいかぬとも漕ぎ
の後とハ通ハうこ漕ぎ奇しこれハ主上のたうくやさ
ハ漕ぎうへしこれハ人なる漕ぎ出ぬ漕ぎ

の後とんぢうく源秘の物行り人皆とりあり
なり平城天子を人丸とりあり人或人の秘訣
とそとうり相伝を是を倉の事くに相伝とも
うるはりにて又まさしくその暦の三月九
生しうく相事行なり人とりの古実紀源をも行
なり九平城天子を人丸とりなりとそむひと当世
婦士一百人後とそそらうく事くに合書も伝ふ

なり元文元年をあらはす事おろそかなれ
ども三のをは海内後とりなりは平生天王はあふ者
て年号はかりうなりすなはちのとりなるやう
わうしめうにうりあの折わけられうなる伝法
人なうりと見れは唐人一人来て行うわやこと
て法をとりて帝に奏しうれはやうて当家まね
しをうれて年四の年たはうひわうしまはそて

の勢ひ人の耳まとゝ聞くことあるうらやみ
天皇と人丸と共に通ひ給ふ寵愛し給ふ
かゝて世の中信仰あるを世に知る唐人
政よ賢者の才を巧らして唐乃家の才を学ん
つゝき孫は寵愛わろて歌書は人丸のわろ
くるれさるもき三年とゝまりて如何況恵
らんといふ名を上給ふ門出義せるて永

と語ふ幸ひよせられ物のうらに此筆わ
らんとゝゝ思ふ人丸借ふ人丸送らを給
ひて物のうらうて舟よせく出さを給きろ
をとゝろまて陸まく人丸と二人酒を見ふく
三年の家の興食はれ酒をあり所を給
ろ人丸もとに対れいろみく山の
をあり所とゝや人丸の家集ゆまさしく侍

行旅と出入らくやうそ山りゝとゝ又ゝ出ゝ
ゝとゝらとやうんそ兼置て行ゝこれこの所ゝと
りて秘義のゝゝじ又ゝ出ゝ赤人の事をゝうゝゝよ
ゝたりゝそれゝゝゝゝ赤人とゝゝ行ゝゝ人丸の
長歌ゝりゝゝゝとゝ家ゝ海ゝ行ゝ人ゝ者ゝ
ゝゝ初編人丸赤人ゝ名ゝの人と者行ゝ行り
ゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝ事ゝ押る西流の義ゝ

ゝゝ人ゝゝゝ歌ゝの義ゝ七事ゝゝとゝゝ也
道の魔障ゝゝゝゝゝゝゝゝ心ゝゝ役の事ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ行れ又寒ゝゝ
の義ゝ西儀ゝゝゝ行ゝ人丸赤人の歌ゝの事
とゝゝゝゝゝ先賢ゝを学ゝ因ゝのゝゝとゝゝ人ゝ
ゝゝゝゝ人丸ゝ赤人ゝ上ゝゝゝ人
事ゝゝゝ赤人ゝ人丸ゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

建保四年九月五日記之畢

遺老板倉氏作定家　在判

以彼本于時室治元年十一月六日

於京都宿所玄写畢

文永六年二月七日彼以自筆本令校訂畢

板倉氏作定家　在判

永仁元年七月六日彼以自筆本令校訂畢

筱恵朝臣為実 嘉

正和二年六月廿七日以自筆本家

芳免出寫畢　　通雲 嘉

享禄五年五月六日以自筆本寫畢

源信良

本末二巻全終

大井躍鯉堂版行

伊地知氏書册